

主論文要旨

「古今」・「東西」に揺れるギリシア・アイデンティティーの多面性 ーニコス・カザンザキスの作品分析を中心にー

福田耕佑

近現代ギリシア文学を代表する作家であり思想家であるニコス・カザンザキス(1883-1957)が作品を通して提示したギリシア像が、西洋の精神文化の源泉として理想化されたギリシア像とは必ずしも合致しない、ロシアや中東、そしてアフリカや極東という非西洋世界での旅と執筆活動に基づいた、多様な文化体験に根差し非西洋的な要素さえをも内に含むものであったことを明らかにする。

古代ギリシアは、とりわけ西洋近代において自分たちの文化的源泉として位置づけられてきたが故に、純粹にヨーロッパ・西方的であってアジア・東方的な要素は含まないものとして位置づけられる傾向にあった。しかし、ギリシアが地理的にも歴史的にもアジア・東方とヨーロッパ・西方の中間に位置しているが故に、ビザンツ時代やオスマン時代という歴史を経た近現代ギリシアは、西欧の知識人たちによりしばしば東方・オリエンティックであるとみなされ、西洋の理想となる古代ギリシアに適さない東方人として理解されることがあった。このため19世紀中葉以降の近現代ギリシアにおいて、自分たちが古典ギリシアの子孫であって先進的西洋世界の一員だと主張するために、西欧化・近代化を推進して自分たちがアジア・東方に属するものではないと主張する、「脱亜入欧」的な議論や親西方・嫌東方的なナショナリズム的思想が展開され、またその反動として過度な西洋化を非難しギリシア中心主義的な思想が展開された。

このため、近現代ギリシアの思想家の大半が自分たちの理想とするギリシア像の中から東方的な要素を忌避していたにもかかわらず、本稿はニコス・カザンザキスが、ギリシアの有する東方的要素を肯定的な形で評価し、古代のみに限定されることのない非西洋世界を含む多様な文化圏に関する考察と思索を含んだギリシア・ギリシア人観を描いたことを明らかにする。そして彼は過度な西洋化やギリシア中心主義的なナショナリズムをも乗り越えて、『禁欲』という自身の世界と人間、そして神に関する思想を産み出しつつ、この世界観に沿う形で古典ギリシア崇拜や近現代ギリシアと古代ギリシアとの紐帯の妄信に陥ることなく、ギリシアを時間的に古代から現代まで、そして空間的に東西に広がりを持ったものとして、二つの連続性を有する存在として描いたことを示したい。

本稿序章では、ニコス・カザンザキスを取り上げる意義をギリシア思想史及び文学史の観点から指摘する。近現代ギリシア思想史及びギリシア・ナショナリズムにおいては、しばしば自分たちをヨーロッパ・西方の側に位置づけ、ギリシアの中から東方・アジア的な要素を退けようとするいわば「脱亜入欧」ともいえる潮流があり、とりわけギリシア国民史記述や民族意識形成において古典ギリシアや西方・ヨーロッパに高い評価が与えられた一方、東方・アジアには否定的な評価が与えられたことを確認する。だがこれに対しカザンザキスは、日本やロシアと言った東方に関する研究と旅行を通して、自身のギリシア・

ギリシア人観を形成するに際し、先行するギリシア思想史及び文学史の知的前提に反する形で東方・アジア的要素を肯定期的な形で取り入れた、という自説の提示を行う。

続く第一章では、近現代ギリシアにおけるギリシア・アイデンティティー問題を論じるための背景として、古代から近世に至るギリシア人の自己意識の変遷について先行研究に基づきつつ概観する。特に、ビザンツ期においてキリスト教がギリシア人の自己意識に深く基づくようになったこと、また中世においてもギリシア古典文化を継承した自分たちが西方・カトリック圏に対しても東方・イスラーム圏に対しても文化的に優位な立場にあると信じていたことを確認する。加えて、西欧近代の啓蒙主義や人文主義の流れの中で発展した古典ギリシアへの肯定的な評価とアジア或いは非ヨーロッパ世界に対する否定的な評価が生まれた過程を先行研究に基づきつつ概略する。

第二章では、初めに西欧の啓蒙主義に影響を受けて発生したギリシア啓蒙主義について概説する。特にギリシア啓蒙主義の思想家たちによる古典ギリシア崇拜と、ヴォルテールらによって専制として酷評された中世ビザンツ時代への軽視によって形成されたギリシア観について論じる。十九世紀前半には、ドイツのヤーコプ・ファルメライヤーが古代ギリシアと近現代ギリシアの歴史的連続性を否定する見解を発表したが、これに対抗する形でパパリゴプロスに代表される歴史家たちがビザンツ帝国を再評価し国民史に組み込むことで古代から現代までを一直線に結んだ国民史を描くことになった。この過程で、近現代ギリシアが「脱亜入欧」の潮流にあって自分たちを西方に位置づけたがったのに対し、西欧の知識人たちの中には、古代ギリシアから切り離されて表象された近現代ギリシアを東方・アジアに属するものだとみなした事例があったことも指摘する。

第三章では、イオン・ドラグミスを代表とする、過度な西欧崇拜を批判してギリシアそのものを探求しようとした知識人たちの思想を論じる。彼らの思想には、カザンザキスにも見られた過度な西欧崇拜への忌避とギリシアそのものを探求しようという意志、そして特にドラグミスにはロシアを介してギリシアと東方世界を結びつける発想が現れたが、彼らにあっては未だギリシアは完全に西方に属するものであり、ギリシアに東方的なもの、特にアジア的なものを属性づけることは変わらず禁忌とされた。

第四章は、カザンザキスの青年期の作品分析を通して彼の思想について論じるとともに、1919年の厚生局での奉職によるコーカサス地方のギリシア人難民たちの本国帰還支援やマケドニア地方への定住運動への従事などを踏まえつつ、カザンザキスの政治活動についても論じる。カザンザキスは当初ナショナリズムと西欧文化、そしてギリシア古典文化に傾倒していたが、1917年には書簡において、自身のアイデンティティーの中にアフリカやアラビアの要素があるという記述を残しているように、ギリシア人としての自身のアイデンティティーの中にアジア・東方的な要素を認めていく萌芽が現れていたことを明らかにする。

続く第五章では、ナショナリズムと決別したカザンザキスがドイツとオーストリアに赴き、当地で社会主義及び共産主義に傾倒し始めていった時期の作品と事跡を論じる。この中で、カザンザキスの関心が完全にギリシア・ナショナリズムと決別したことを主に書簡の分析を通じて示すと共に、この時期に描かれた『饗宴』を分析することで、カザンザキスが反西欧崇拜的な思想を形成するようになっていったことと、次章で見る『禁欲』の思

想が彼の中心的な思想となっていたことを論じる。

そして第六章では、カザンザキスの思想的著作『禁欲』の内容を章ごとに分析し、ここに表現された思想を明らかにする。特に本稿では、カザンザキスに独特な神論である「人間による神の救済」と救済に向けての「上昇」という概念について、ニッサのグリゴリオスを中心にした正教神学の「神人協働」と「参与」、そして「自由」の観念を結び付けながら論じ、従来は西欧哲学やプロテスタント＝カトリック神学との関係で研究されてきた彼の神論が深くギリシア正教の神学にも結びついたものであることを明らかにする。

第七章では、カザンザキスの三度にわたるロシアへの滞在とこの体験をもとに執筆した作品を分析する。この時期の作品には前章で見た『禁欲』の思想が随所に反映されていること、そして同時期に訪れた中東での体験を通して、カザンザキスの「東方」の意味がより具体的になっていったこと、そしてロシア文学の研究を通して後に彼の作品の中で重要な役割を果たすことになる「民衆」と「大地」の概念を得たことを明らかにする。

第八章は、この時期に刊行されたスペイン旅行とこの時に執筆された『スペイン旅行記』を分析する。前章までに見たカザンザキスの東方の探求の中であって、彼によってスペインがアラビア的な要素を有した東方として理解され、この点でカザンザキスの思い描くギリシアのイメージのひな型の一つになっていることを論じる。特にカザンザキスは、スペインにおいてもロシアやギリシアのように近代化・西欧化か自民族性の追求かというジレンマに陥ったことを指摘し、この中でもミゲル・ウナムーノの「ヨーロッパのスペイン化」という解決策を高く評価し、西欧化に傾倒しないギリシアのあり方を考察していたことを明らかにする。

第九章では、カザンザキスの極東旅行とこの旅行を通して執筆された旅行記『日本と中国を旅して』で描かれた日本像を分析する。この中でカザンザキスは、ロティやハーンの作品に描かれた日本像を踏まえつつ、「心」、「桜」、「富士山」、「不動心」を『禁欲』の世界観に基づく形で表象し、日本を自身の思想に基づく形で描いたことを指摘し、極東旅行が単に物見遊山に終わったものではなく彼の思想の中で一定以上の意味を有するものであったことを論じる。

次に第十章で、カザンザキスに先行するギリシアの知識人たちが忌避とした（古典）ギリシアとアジアを関連付けるという禁忌をカザンザキスが犯し、日本と古典ギリシアの文化比定を行い、歴史上直接の接点はなかった二つの文化に近似している点を肯定的に描きながら古典ギリシアを描き出していったことを論じる。しかし、当初は反西欧的なものの探求の中で極東に対し「東方」を軸に親近感を感じていたが、極東で過ごしていく中で白人と黄色人という人種の違いを痛感すると共に、ギリシアの持つ西方性の探求へと関心が移って行ったことも併せて論じる。

第十一章では、カザンザキスのギリシア旅行とイギリス旅行を取り上げ、そしてこれらの旅行を通して執筆された「ペロポネソス旅行記」と『イギリス旅行記』を主に分析する。この中で彼は東方の探求からギリシアの西方性の探求へと関心を移し、地理と歴史、そして哲学的思考の観点からギリシアの有する西方性を思想し、これをヤンノプロスやテオトカスといった同時代の思想家たちの思考とは距離を取りつつ「調和」と「均衡」という形で表現したことを論じる。

第十二章では第二次世界大戦期のカザンザキスの作品を分析する。本章ではカザンザキスが戦禍の中で「ギリシア性」として「ギリシアの歴史的連続性」と「ギリシアの有する東西の融合」を提示したことを明らかにする。特に小説『その男ゾルバ』において展開された「ギリシアの有する東西の融合」の思想を通し、フリードリッヒ・ニーチェの「アポロンのなもの」と「ディオニソスのなもの」を用いつつ、アジアでもなければ西欧でもない、単に東と西の間にある国としてのギリシアではなく、「東西の重なり合う領域」であり「まさにギリシア」という地にあるギリシアの特質を描いていったことを論じる。

最後に第十三章を通じて、カザンザキスのギリシア内戦期の動向とこの時期に執筆された『キリストは再び十字架に架けられる』と『兄弟殺し』を執筆し、この二作品がギリシア内戦をモチーフにしていること、そして両作品とも『禁欲』の基本思想とプロットをなぞる形で物語が展開されていることを論じる。そして、両作品とも前章で論じたカザンザキスの「ギリシア性」が文学を通して表現されていることを論じるとともに、この「ギリシア性」を体現する媒体としてカザンザキスが選んだのが、古典ギリシアや栄光や富を体現するような成功者ではなく、迫害や戦禍に巻き込まれ同胞からも差別を受ける難民たちであること、そしてこの難民たちが東方に居住するギリシア人であり、カザンザキスの東方性の探求が活かされていることを論じる。

以上をもって、カザンザキスによるギリシアの探求が第二次世界大戦期までに描かれた、「ギリシアの連続性（歴史的側面）」と「ギリシアの空間的東西性（空間的側面）」を内容とする「ギリシア性」の探求に結実したことを論じ、これまでギリシア国内外の先行研究で十分に取り扱われることのなかったカザンザキスのギリシア・ギリシア人観を本研究が明らかにしたことを指摘する。特に本研究が指摘するカザンザキスのギリシア・ギリシア人観の特徴は、カザンザキスが反西欧崇拜と極東やロシアでの体験と執筆を通して「東方」を探求することで、従来近現代ギリシアで禁忌とされていたギリシアにアジア的要素を認めるという独創的なギリシア観を描いているというところに存する。